めぐる〈生の時〉と〈死の時〉
――蠱惑する〝閾〟の風景

辺見　庸

ジャコメッリの芸術は深い蠱惑の森である。薄明のなかを歩けども歩けども果てなく、終わりかと想うと、目眩く光がふりそそぎ、新たな風景がもうはじまっている。どこか「劫（こう）」にも似た、時間的継起の失せた記憶の葉叢にかこまれるうちに、私たちの意識はいつしかめくりかえされて、陶然と、あるいは慄然として立ちつくすほかなくなる。人の記憶や幻想や惑乱をこのように結像させてみせることを、たんに「写真」という言葉におきかえてよいものか、私にはいささかのためらいがある。ジャコメッリの作品はおそらく、写真をこえてひろがる、他のアートにくらべさらに心的で先験的な芸術にちがいない。彼はまた、ここが肝心なところなのだが、たそがれゆく森の奥の底なし沼にも似た、人間意識のあわいに浮きつ沈みつする、いわゆる「閾（いき）」の風景をもとらえようとする。なんという大胆なこころみであろうか。こうした冒険はしばしば、文学や絵画で専権的になされてきたのだが、ジャコメッリは写真映像によりジャンルの垣根をなんなくこえて、詩以上に詩的内面、絵画よりも絵画的深みを光の造形に植えつけた。たしかに、彼の諸作品を写真ではなく映像詩などと同定するむきがあったとしても不思議ではない。静止画像でありながら、見ようによっては、ゆるやかにうごめく動画でもありうる。躰の外側の眺望であると同時に、私たちの内奥の景色でもある。しかしながら、ジャコメッリの芸術を二十一世紀現在の無機的分類法にそうて画然と位置づけようとしたところで、どんな意味をもちえようか。彼の作品はすでにして写真をぬけでて、言語世界にも着床し、さらにそこからもゆっくりと飛びたって、未生以前の風景とはるかな未来、すなわち〈生の時〉と〈死の時〉をいま、いく度も静かに往還している。ジャコメッリの芸術はいつの間にか実時間を脱し、そうすることで〈とことわの時間〉を獲得したのである。すぐれてカラフルなモノクロームを表現しえたことで、万象の色彩をつとにこえたのである。それは、最新のデジタル技術を総動員してもよくなしえない、魂の芸術である。